

江戸幕府老中知恵伊豆の母は北本所縁の深井氏！

深井対馬守景吉

深井村 (後の北本市深井)

深井氏は長尾景春の子孫で、祖父の景行の代に深井に移り住んだと伝えられている。父の景孝が深井に生まれ深井姓を称した。岩付太田氏に仕え太田氏資が永禄10年(1567年)に三船山の戦いにおいて戦死した後も、完全には帰農せず北条氏政や太田氏房の家臣として名を連ねた。

父(大河内久綱)も代官で妻の父(深井好秀)も代官だったんだ

深井景吉

・岩付城主太田氏資に仕え、後北条氏と安房の里見氏と上総三船台(千葉県君津市・富津市)の合戦に従軍するも、氏資戦死。深井村に退き、宮地・生出塚等の開発に従事する。その面積は、300町歩と伝える。菩提寺である寿命院の再興は、父、景孝の戒名から「金蔵院」近在の人々から呼ばれていた殿林から「殿林山」と名付け、持明院を寿命院と改める。

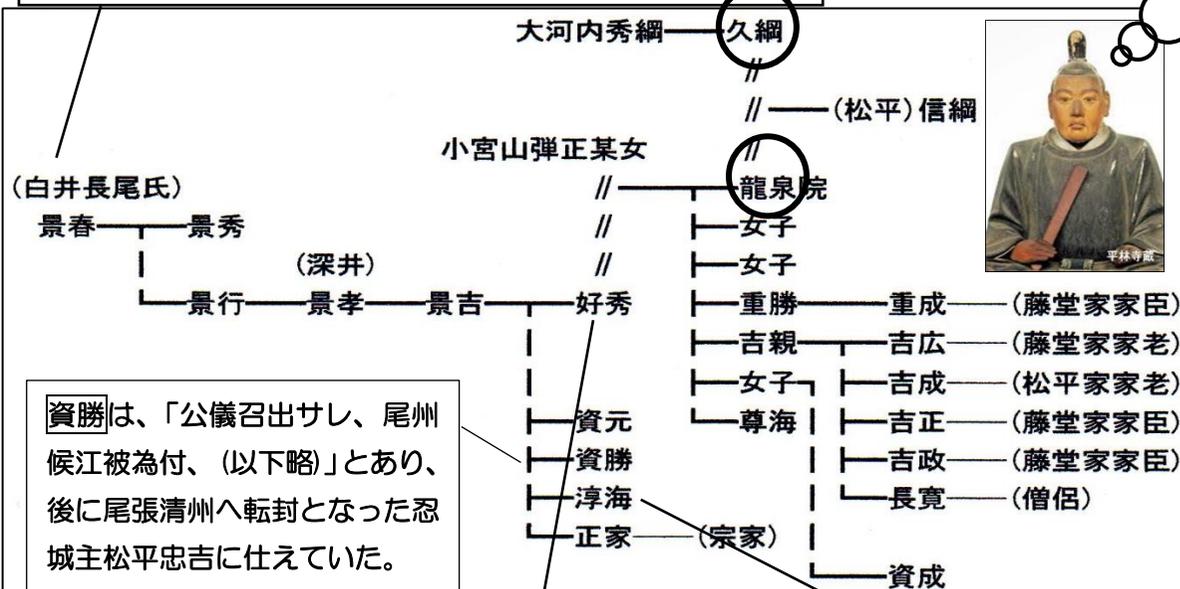
深井氏と家康の関係「深井勘右衛門由緒帯刀願の記録より」

- ・家康が深井亭を訪れ、忍・岩付合戦時の様子を聞き、景孝が開発した田畑・山林を見学する。立ち寄ったおりに献じた自家製のお茶を、家康が大いに気に入り、以降、毎年新茶を献上する。
- ・屋敷地が検地以降も除地「吉町五畝三步」として認められる。
- ・対馬守親子の案内で家康が鷹狩りをする。
- ・文政年間も深井家の抱え百姓16軒の記録があり、本百姓に隷属する中世的な抱百姓を持っており、幕末まで続く極めて特殊な例。
- ・「郷土」「郷侍」として、享保6年(1721)まで、農村に住みながら名字帯刀を許される。土農工商を原則とする近世社会において、その枠を悦脱した存在。
- ・鷹場の警護を任務とする野廻り役につく。地元の人々は、「宮地の殿様」と呼ぶ。

深井一族の子孫は、

- 1) 土着して中山道鴻巣宿の草分名主となった一派
- 2) 藤堂家に仕えて藤堂姓を許された一派
(分家は本姓の深井を名乗る)
- 3) 松平伊豆守家に仕えて家老職をつとめた一派
- 4) 高崎藩(松平信綱の五男・信興を祖とする)に仕えて家老

山内上杉氏の家宰(家老)をつとめた長尾景春の後裔と言われる「長尾景春の乱(関東の応仁の乱とも、上州白井城主)」



(龍泉院) 松平信綱母の逆修供養塔(鴻巣勝願寺)

資勝は、「公儀召出サレ、尾州候江被為付、(以下略)」とあり、後に尾張清州へ転封となった忍城主松平忠吉に仕えていた。

好秀

景吉の嫡男「藤右衛門」は、太田氏資から「資」の一字を賜って資正を名乗り、後には氏房にも使えている。天正17年(1589)印判状では、従来通りに粕壁領の諸役を免除するので、人々を集め新田開発に励むよう命じられている。天正17[1589]年頃には、粕壁(春日部)の代官職をつとめている。(『戦国遺文 後北条氏編』)なお、系図には藤右衛門(資正改め好秀)が、「松平伊豆守信綱候仕フ」という記載があるが、藤右衛門の娘(龍泉院)は大河内金兵衛久綱に嫁ぎ、久綱との間にうまれたのが後に知恵伊豆と言われた老中信綱である。

老中 首座

淳海

四男淳海が中興開山第6世として住職を務め、深井家の菩提寺となる。天正19年(1591)に、家康から朱印状を与えられ、以降も朱印寺となる。

生年月日：1596年12月19日
死没：1662年5月4日(65歳)

松平 信綱は、江戸時代前期の大名で武蔵国忍藩主、同川越藩初代藩主。老中。官職名入りの松平伊豆守信綱の呼称で知られる。島原の乱、鎮圧の功により老中首座、家光の側近として、江戸図屏風作成他。